
お仕置きはケツアンカー一択

三羽鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お仕置きはケツアンカー一択

【Nコード】

N1877V

【作者名】

三羽烏

【あらすじ】

寺子屋に通う平凡な少女、聖白蓮は魔法僧侶である。

地上の支配を目論み侵略せんとする地獄の妖怪連合と戦うため、毘沙門天より授かった力で魔法僧侶へと変身し、日夜戦っているのだ。

寺子屋に通う平凡な少女、聖白蓮は魔法僧侶である。

地上の支配を目論み侵略せんとする地獄の妖怪連合と戦ったため、

毘沙門天より授かった力で魔法僧侶へと変身し、日夜戦っているのだ。

——魔法僧侶 ナムサン ひじり——

Episode Final

黄昏時。

誰そ彼ぞが語源であるこの言葉は、夕暮れに暗くなり、すれ違ふ者の顔さえも判別できないことから付けられたのだという。

昼から夜へと移り変わるこの時間帯は、空の美しさを感じさせるのと同時に言いようのない不安を与える。……赤い色は、人の心をかき乱す。人を高揚させるものは、同時に地に足がついていないと錯覚させてしまうのだ。

そして今、文字通り“地に足が付いていない”状態で戦う二つの影があった。

「ハハハハッ！ どうした、ひじりイ？ 貴様の力とはこんなもののなのか！？」

尼を思わせる頭巾を被り、右手に金色の輪を持った女性が愉快そうに笑う。黙っていればさぞ美しいであろうその顔は、しかし見る者に恐怖と嫌悪感を抱かせる程の悪意と残虐さに満ちていた。

轟音と共に白蓮の鼻先を雲で形作られた巨大な拳が掠めた。異形の拳はそのまま破壊と旋風を振りまいて、地上に大きな拳型の痕跡を残す。上空で繰り広げられる戦いを見守っていた人間たちの悲鳴が上がった。

「……ッ！？ そんな、」

「ほらほらほらあ、よそ見をしている暇があるのか！」

——潰滅「天上下連続フック」——

戦いを見守る人々に気を取られた白蓮を嘲るかのような声と共に、一つのスペルが宣言された。

直後、女性の背後に控えた妖怪入道の姿が数倍に膨れ上がる。そして、乱舞と言っても過言ではない、数え切れないほどの雲の拳が縦横無尽に飛び交い、見た目以上の威力で以て白蓮に迫る。地上から戦いを眺める者達には、白蓮が怒涛のように襲い来る雲の濁流に飲み込まれたように見えただろう。

入道を使う程度の能力を持った妖怪、イチリン。形や大きさを自在に変える事が出来る程度の能力を持った入道、ウンザン。

この二人の妖怪の絶妙なコンビネーションに、白蓮は苦しめられ

ていた。

彼女とて無抵抗でやられている訳ではない。弾幕で迎え撃ち、その巨大な拳を逸らし、時に撃ち消しているものの、次から次へと補充されてはキリがない。何故なら、彼女たちが今戦っているフィードは空。その拳の材料となる雲はそこら中にあるし、そうでなくともウンザンの能力が厄介だ。

白蓮は接近してきた拳の群れにあえて飛び込み、僅かな隙間を縫うように回避してきたものの、ついに弾幕の袋小路へと追い詰められてしまう。

「もはやどう足掻いても逃げられまい、……このまま力エルみたい
にぶッ潰れちまいな！」

迅く、重い一撃だった。真正面から撃ち込まれた拳撃が咄嗟に庇った両腕にぶつかり、ミシリと嫌な音を耳に届ける。それは、かなりの質量を持ったものが衝突することではか生み出せない音だ。

「く、あつ」

白蓮の口から出たのは苦痛に対する悲鳴ではなく、肺から空気を絞り出すかのような呻き声だった。

そのまま、雲の鉄拳は白蓮を押し潰さんと地上を目指し、凄まじい衝撃を伴って『墜落』した。周囲の街路樹がなぎ倒され、建物がぐらぐらと揺れる。土煙りが舞い上がり、辺り一帯を覆い隠した。

「くっひやははははははははははは！！ 勝った、勝ったぞッ！
これでッ、これで私はッ、……………何？」

嘲弄混じりの哄笑がぴたりと止む。暗い喜悦で満たされた表情が、狼狽のものへと変化した。

どこからか吹いた一陣の風が土煙を吹き飛ばす。そこに立っているのは……。

「……——超人『聖白蓮』——」

荒い息の下、白蓮が呟く。彼女が纏う黒を基調としたゴシック風の衣はあちこち千切れ飛び薄汚れていたが、彼女自身は変わらず健在だった。己の両足で、大地を踏み締め、立つ。…立っている。

「ば、馬鹿な……！」

ここに来て、イチリンの顔が初めて驚愕の色を見せる。今の一撃はイチリンとウンザンにとって最良とも言える渾身の攻撃だった。だが白蓮は無様に倒れ伏すどころか立ち上がり、こちらをまっすぐに見ている。消耗で青ざめているその顔は、しかし気品と気高さに溢れ、同性のイチリンであつても魅了する程に美しかった。

「私は負けない。負けるわけにはいかない。私自信の夢を、理想を後悔しないために……私はみんなを、守りたいから！」

絶対の意思が、願いを成就させる力となる。
気高く強い意志が、人々の想いを結ぶ。

「はあああああ！？ 夢エ？ 理想ウ？ 綺麗事を詩人のように語るな！ 人間どもは己の身を守るために貴様ら魔法僧侶を利用してただだろうがッ！！ ひじり、貴様はいいように利用されてる道具なんだよ！！」

周りの人間の眼をしてみる！ テメエに対する怯えと拒絶に染まつてるからよオ！ 妖怪の力は素晴らしい、人間なんて簡単に捻り潰せちまう。じゃあその妖怪を倒す魔法僧侶はどうだ……？！」

白蓮の言葉に、イチリンは過剰なまでに激昂した。散らされた雲が再び集まり、彼女の元に渦巻いて超巨大な魔人の姿を形成する。そう、イチリンが言ったことは事実であった。地上を侵略せんと暴虐の限りを尽くす妖怪の前に立ちふさがる魔法僧侶たち。彼女たちは人間の希望だ。だが、ひとたび魔法僧侶たちが人間側に牙を向けば、妖怪と同等以上の脅威となるのだ。

普通の人間が魔法僧侶に対して畏怖の感情を抱くのは想像に難くない。

「確かにそうかもしれない。いえ、かつてはそうでした」

——でも、今は違う。

「……………こ、れは……………」

怒りと悪意。そして、悲しみと苦しみに満ちた心のままに白蓮に迫ろうとしていた雲の魔人が動きを止める。

眼下の光景に、イチリンは言葉を失っていた。

街に、声が響いていた。その内容は励ましであったり、鼓舞するものであったりと様々だが、どれも白蓮に対して向けたものだった。その背に投げかけられているのは声援や希望であり、魔法僧侶ひじりに対する信頼の叫びだった。

どこから集まって来たのだろう。空中に浮かぶイチリンには、地を埋め尽くすほどの人の波がはつきりと見えていた。

……普通ならば避難するべきだ。戦いなんて他の奴に任せて、自分は危険地帯からさっさと逃げ出すべきだ。

なのに、これだけの人間が集まっている。いや、今も集結を続けている。

何のために？ ……決まってる、白蓮を応援するためだ。何の力にもならないかもしれないけど、それでも彼らは何かせずにはいられないのだ。

「これが、私が積み上げてきたもの。信仰の力です」

魔法僧侶として戦い、地上を地獄の侵略から守って来た。その積み重ねが、救われた人々との絆が、今ここに繋がった。

白蓮が一步前に進み出る。彼女の全身は金色の魔力が駆け巡り、その姿は後光が差しているかのようにイチリンには見えた。

「いざ、」

「ま、待て……、」

「——南無三ツ——！」

光が、弾けた。

無音の爆発が魔人の内部に埋まる様に位置していたイチリンの元まで到達する。

闇を照らし上げる光の中、人々の眼には魔法僧侶ひじりの姿がしっかりと見えていた。

「さあ、どうだったかしら？　これが私の作り上げた至高にして究極の芸術作品。新たな信仰獲得戦略！　魔法僧侶ナムサンひじり（無印）全12話よ！」

命蓮寺の御堂にて、水兵服の少女——村紗水蜜が心底誇らしげに宣言した。

壁に張られたスクリーンには、妙にデフォルメされた幼い白蓮の姿（10歳程度だろうか？）がEDクレジットと共に映っている。ちなみに変身後は15歳前後の姿に成長できるという設定だった。

『……………』

誰も、何も言わなかった。げんなりとした、あるいは白けた空気が辺りを満たしていた。

ただ一人を除いて。

「ムラサアアア！！　何よアレ！　何なのよアレ！！」

雲居一輪である。

雲山の制止も無視して飛びかかった一輪は、そのままムラサの襟元を掴むと片手でゆうゆうと釣り上げてしまう。ムラサの足がぷらぷらと宙に浮いた。

「ま、まあまあ。気持ちは分かるが少し落ち着いたらどうだい？」

……仕方ない。作中でラスボスにされたところか、あんな扱いでは怒って当然だろう。……正直どうでもいいけど。

思うだけで声には出さず、ナズーリンは思いっきり嘆息した。

「ふふん、安心しなさい一輪。確かに無印では扱いが悪かっただろうけど、続編では一輪は仲間として活躍するから！」

しかし、空気を読んでいるのかいないのか。……いや、読んでないんだろうなあ。

ムラサは一輪に釣り上げられつつも、不敵な表情で胸を張る。

「ま、待つてください。続編？ 続編って言いましたか、今？」

ムラサの言葉にピクリと耳を動かして、寅丸星が立ち上がる。

その顔は、瞳は、……何やらキラキラと輝いていた。とても楽しそうだ。

「（ああ、ここにも馬鹿がいた）」

ナズーリンが頭痛を堪えるかのように頭を押さえる。そんなナズーリンの肩を、ぽんとぬえが叩いてやった。

そんな二人など目に入らぬかのように、ムラサはますますご機嫌な様子。その姿に毒気を抜かれたのか、一輪も手を離してしまった。

「そうよ！ その名も『魔法僧侶ナムサンひじり マッスルハート』！」

初期は極悪非道の限りをつくす妖怪を退治する勧善懲悪的な内容で人間の信者を獲得し、中盤からは妖怪達のやむを得ない事情や悲

愴な過去をキツチリ描写。

命令されて苦しみながら戦っているなどの事情を知ることによって、聖は単なる妖怪撃退ではなく妖怪を更生させ、仏門へと帰依させるようになるの！

やがて互いに手を取り合う道を模索するのが目標となり、途中に生き別れになっていた命運とも再開。

そして判明する真の黒幕！ 物語はクライマックスへ急転換！！」

これ以上は見てからの楽しみよ！ と、満面の笑みで言われてしまった。

ほんと、誰か何とかしてくれこの船幽霊。変な方向に気合いが入りすぎだろう。何でこんなにノリノリで描いてるの。

流石の白蓮も、ムラサの作った珍アニメーションには上手い言葉が浮かばないようだ。乾いた笑みを浮かべている。

「どうですか聖！？ 私の作ったコレ、いけそうですか！？」

「え、あ…その。……悪いのだけれど、私はこういったモノには詳しくないの。だから、よくわからないわね……」

「な……！？」

白蓮の放った言葉に、ムラサはよよと片膝立ちに崩れ落ちる。

そんなムラサの姿を見て、白蓮は自分の考えを恥じた。

自分に理解できないからといって、その全てを否定するなどなんと傲慢なことなのだろう。少なくとも、ムラサは命蓮寺のためになると考えてこのようなモノを作ったのだ。生半可な苦労ではなかったはずだ。

「あ、あのね、ムラサ。確かに私には“あにめ”という物の良さは

分かりませんが、あなたが私や命蓮寺のために一生懸命であることは良くわかりました。だからそんなに落ち込まないでもいいのよ？」

にっこりと笑いかける。

ムラサは何か感激したかのように目に涙を貯めた後、片膝立ちのまま白蓮の差し出した腕に抱きついた。

「ひ、ひじりいいい!!」

感極まったようなムラサと、ムラサを優しく抱きしめる白蓮。上手く表現できない妙な空気が形成された、そんな時だった。

「あれ、これは何ですか？ ムラサの言っていた続編とは少し違うようですが……？」

続編を見ようとも思ったのか、勝手にムラサの鞆をがさごとと漁っていた星が“それ”を手にとった。

「あゝ」

それは、DVDケースのような入れ物。そこに描かれた白蓮そっくりの幼い少女。

題名は『魔法聖女 ひじり ナムサン（18禁）』。

…………… 18禁。

「……………」

「……」

にっこりと、白蓮が笑う。

「……あ、あの——」

一瞬の内に繰り出された閃光魔術が、ムラサの意識を刈り取った。
シャイニング・ウィザード

結局、ムラサの作った魔法聖女ひじり ナムサンはお焚きあげで
処分されることとなった。

普通のアニメ作品の方は……意外や意外、人里で多くの信者を獲
得しているとか。

……少女祈祷中。

（後書き）

村紗の作った設定集

○聖白蓮『魔法僧侶ひじり』

毘沙門天より授かった力で魔法僧侶へと変身して戦う少女。見た目10歳前後。

普段は寺子屋に通っていて、変身後の正体は寺の面々以外は知らない。

携帯の着メロと変身音は般若心経「ぎゃーてーぎゃーてー」

○イチリン&ウンザン

地上の支配を目論む地獄の妖怪連合師団長。無印におけるラスボス。

続編ではピッコロさんのごとく仲間になる。

○ナズーリン

毘沙門天が力を授ける魔法僧侶の適性ある者を探す営業兼ひじりのマスコット。姿はネズミ。

○命蓮

魔法僧侶ナムサンひじりの世界において、ひじりの生き別れの弟。

続編では地底を統一し、地獄の王となっている。何やら理由がある様子。

完全に悪ふざけの産物です。キャラ崩壊してるのが嫌いなひとはいませんか。

設定を考えてる時が一番楽しかったりします。

でも、キャラ設定や能力設定ばかり書いて充実させると話がダメになりやすいんですね。

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1877v/>

お仕置きはケツアンカー一択

2011年10月9日12時02分発行